

Herman Melville の宗教的影響について(3)

Moby-Dick と Calvinism

岡 本 雅 夫

岡山理科大学教養部

(1989年9月30日 受理)

はじめに

本論は、本紀要第24号(B)に掲載された同題目のものに連続するもので、「Moby-Dick」に見出される宗教的背景、影響などについて考察することを目指している。前回と同様に、Thomas Walter Herbert 'Moby-Dick and Calvinism' のPart IIの中で展開されている宗教論的な作品論を追って、Melvilleの人及び作品に見られる宗教的影響と、作品に表現されているMelvilleの宗教観を考察すること目的としている。

思索の悲劇性 (tragicalness of human thought)

Melvilleは、Moby-Dickを執筆する間に、Hawthorne に幾通もの手紙を書いているが、Herbert は、「これらの手紙は、真理の謎と格闘するという知的問題と、そのような格闘をする精神的苦悩を表わしている」¹⁾と述べて、手紙に窺われるMelville が創作過程で示す思索の展開を追っている。

1851年4月、Melville は、Hawthorne の新作 The House of the Seven Gables を読んで、手紙を送っている。その中で、Melvilleは、この作品が他の作品をしのぐものであると賞賛する、がしかし、「人間には、或る悲劇的な一面があり、Hawthorne 程、これを具現したものはいない。この悲劇的一面とは、人間の思索が、偏見を持たないで生来の深い働きをする時の悲劇性 (tragicalness) です」²⁾と書いている。Herbert は、この手紙にある悲劇性を次の様に解釈している。「知力による探求は、それが及ぶ現実の世界では、歓迎されるよりはむしろ逆に悲劇的に拒否される。探求者の知力の誠実さ (intellectual integrity) は全宇宙の抵抗に会って始めて維持できるだけである。探求者は、例えば Serenia の神のように心身を消耗する探求にも戸を開く神の力 (divine powers) と戦わなければならない。」³⁾そして、Melville は、究極的問題 (ultimate problems) についての思索を可能にする考え方として、自分自身の形而上的主権 (metaphysical sovereignty) を主張するとして、Herbert は次の手紙を示している。

「天国や地獄、そして又地上に存在する列強 (the powers) の中で、ロシヤや英帝国のように、自らの内に主権的本性 (a sovereign nature) を持っていることを宣言する人間を

称賛する。このような人間は滅びるかもしれないが、存在する限りは、同等の立場で、全ての列強と取引すべきである」⁴⁾そして更に、人間と神の本性を民主的な同等のレベルに並べてみても、その人間や神の本性を明確に定義する用語（terms）を使用することによって、思考が圧縮せざるを得ないことに気付いた Melville は、「私、神、本性などと言う言葉を口にした途端に、踏み台をけって、梁に首を吊すことになるだろう。その言葉が死刑执行人になるのだ…」⁵⁾と書いていると、Herbert は説明し、これについて、「この言葉は意味深く、その意味が濃縮されているから、謎めいている。しかしながらこれは、Melville が陥っている精神的苦境を示している」⁶⁾と解釈して、窮屈的問題の知的探求においては、これまでの宗教に関する表現の因襲的な型にはまり込むことは、自殺同然のことになるだろうと、Melville が Moby-Dick の中で展開する知的探求の方法について苦悩していたことを指摘している。

次に、Melville が Hawthorne に書いた手紙を、Herbert は、「自らの洞察に完全に誠実であるが故に、世間から排斥されざるを得ない宗教改革者の役割を自分に与えることによって、Melville は、自分の根本的探求が読書大衆には歓迎されないであろうことに気付いたのだ」⁷⁾と述べている。

1851年の6月頃に書いたとされている Hawthorne 宛の手紙には、Moby-Dick の中で展開している宗教的葛藤とスケジュール通りに仕上げることができない苦惱が、現実的には、金銭的逼迫となって一層の精神的な緊張をもたらしている様子がうかがわれる。何通かの手紙を次々に出しているが、Melville の精神状態を端的に表わしているものを挙げると、

「‘鯨’のことを話していましたね。3週間程前に手放した時、奴は漁師が言うように、‘鉛をくらって死んでいました’。この頃の本のように本質的には短命なものを、丹念に書き上げて何になるでしょう。私は今世紀の福音書を書きましたが、溝にはまって野垂れ死するでしょう（Tho' I wrote the Gospels in this century, I should die in the gutter.）」⁸⁾というのがあり、又、Pittsfield 近郊の農家を購入した代金を払うために出版業者に前払いを要求して断られ、5年の期限で、2,050ドルの金を9%の利子で借入れせざるを得なくなったり、5月になると、一家が冬を越すのに必要な農作業で、執筆も思うように進まなかつたりした時期に書いたものには、「…私は身の周りの事情であちらこちらへと引張り廻されています。いつもものを書いている時、当然ある筈の静けさ、涼しさ、物言わぬ草が伸びているような気分は、滅多にはありません。金銭が私を滅します。意地悪な悪魔が戸を開けて歯をむき出してにやにや笑いながらのぞいています。不安な予感がします。私は疲れ果てて死んでしまうでしょう。…私が書きたいと最も心を動かされること、それは禁じられているのです——それは金にならないでしょう。しかし乍ら全くのところ、他の書き方は、私にはできないのです。（…What I feel most moved to write, that is banned, — it will not pay. Yet, altogether, write the other way I cannot.）ですから、でき上ったものは、最終的ごたまで、私の本は全て見苦しい継ぎはぎです。（So the product is

a final hash , and all my books are botches.)」⁹⁾ というのがある。

しかし、この同じ手紙の中で、Herbert によれば Melville は、現在の苦闘が、深く幾層にもなっている自分の個性を力づで押し開き、今となっては限りなく遠いと思われる時代に確立された心の形態を明らかにすることを示す比喩的表現を用いるのである。

「私は、エジプトのピラミッドから取り出された種子に似ています、この種子は三千年もの間ただの種子でしたが、英國の土に植えられて成長し、青い葉を付け、それから未熟なまゝ地面に落ちたのです。私もそうです。私は25才になるまで全く何の成長もなかったのです。25才以後私の人生は始ったのです。その時から今までに、私が内部で開花してからほとんど三週間も経ってはいません。しかし今私は、球根の一番奥の葉にやってきていて、そして間もなく花は地面に落ちるに違いないと感じるのであります。」¹⁰⁾

Herbert は、この部分について、Melville の文学的知的発達の目まぐるしい程の早さは、成長の普通のスケジュールの中斷によって生じていることを説明しているのであると述べ、彼の最も深い部分の生活の中での思考や感情が、余りにも長い間休止していたが故に、熱気を帯びた豊かさで盛んになったのだと解釈している。そして、「Melville の幼い頃の宗教教育によって生じ、長い間埋れていたさまざまな問題が、抑圧された幼年期に伴うあの古い雰囲気と共に意識の中へ入り込んできたのだ」¹¹⁾ と説明している。Herbert は、Moby-Dickの創作過程の中で、Melville が自らの根本的探求の内容と方向に不安や焦燥を覚えながらも次第に採るべき手法を明確にして行く経緯を明らかにしている。つまり、人間の悲劇的な知的探求や思索は、神の力に抵抗しなければならない→神の力に対抗する人間の自主的本性の主張も、所詮は、神を宇宙の中心とする伝統的宗教観の枠組の中では自殺に等しいことになってしまう→宗教改革者としての予言的能力を發揮しての真理の探求も大衆には受け入れられない。堂々めぐりを繰り返しながらも、その精神的苦悩は、Melvilleの内部に幼い頃から抱かれていた宗教的葛藤の中へ彼を導いて行ったというのである。

Herbert は、この点をさらに次の様に述べて、Moby-Dick の創作過程における基本的構想を明らかにしている。

「Melville は、自分の内部に向って深く掘り下げて行きながら、盲目的な心理的葛藤以上のものを発見した。Melville は、自らの心理的混乱全体に表われる、豊かな、入念に作り上げられた知的伝統の特色あるテーマとモチーフを持つ伝統的なカルビニズムをめぐる論争を発見したのである。Melville の心の葛藤を調和させる真理の探求は、彼の文化的遺産と折り合いをつける努力でもあった。Melville は、この遺産の持つ様々な要素を取り上げて、それらの本質的意味に対する自らの直観的理解に忠実な用語を使って、それらの要素を再構築する方法を見出したのである」¹²⁾。更に Herbert は、「人間の道徳的経験については、一神主義的解釈 (theocentric interpretation) は有効でないという可能性を探ることができる美的枠組 (aesthetic framework) を見出したが故に沈黙を破ることができ、鯨を追う話に、彼の時代の最も深い問題に関するいろいろな意味を与えたのである」¹³⁾ と述べ、

Melville の基本的構想が何であったのかを指摘している。

偏執（bigotry）と懷疑主義（skepticism）

Herbert は、Melville が *Moby-Dick* の構想の骨組とした伝統的宗教觀が、彼の時代にいかなる様相を示していたか、そして Melville が着目したと思われる宗教的論争の主要点はいかなるものであったかを示すために、1853年に発表された Edward Beecher's 'Conflict of Ages' を挙げている。この書物は、神と人間の道徳的関係についての論争を扱っているが、Herbert は、Beecher の主張の要点を次の通りに述べている。「人間が陥っている最も極端で危険な精神的苦境（spiritual quandaries）は、『第五の経験』（The fifth experience），或いは『神の栄光の消滅』（the eclipse of the glory of God）と呼ぶものである。人間の生きている世界は、原初から今日まで陰惨で恐しい暗い影に覆われている、極めて神秘的な程に恐しい体制である、と考える精神状態がある。この様な精神的苦しみは、人間の条件に関するカル빈主義の認識（Calvinistic perception）が、神は人間を‘名誉と権利の原理’（the principles of honor and right）に従って扱うという改進主義的信仰（liberal belief）と組み合った時に生じるのである。この二つの信念が融合すると、神の栄光は消滅する、そして心を責めさいなむ矛盾（excruciating contradictions）が‘悪意を抱く神’（malevolent God）を人間の心に与える。」¹⁴⁾ そして、Herbert は、Melville がしたように、「神の正義に疑問を持つ時、その疑問に含まれる意味を理性に従って追求することは、それを行う人間に狂氣と思われる結論を出させるかもしれない」¹⁵⁾ と Beecher が認めていることに注目し、更に Calvinism の影響についての Channing の警告を引いて、そこに Melville と共に通の認識を見出している。「Calvinism は、宇宙を暗い影の中へ投げ込んで、理性の王座を揺るがすかもじれない。もし、Calvinism を信じるとすれば、狂氣と境を接する絶望にも根拠があると思う。（If it be believed, I think there is ground for a dispondence bordering on insanity.）」¹⁶⁾ Beecher に依れば、Calvinistic belief と、liberal belief が、同じ心の中でもつれ合う時、神の栄光はかけり、悪意を抱く神が浮かび上ってくることになるが、Beecher が、「いかに多くの人がこの暗い谷間に入って行くことか、これは人間が公にしたいと思わない経験であると認めざるを得ない」¹⁷⁾ と述べていることと結びつけて、Melville は、そのような暗い意識についての洞察などを公表する危険は承知していて、宗教界の指導者のように何かキリスト教徒的な結論を出そうとは思わない。Melville は、「狂氣と思われる様々な確信が、現実の軸そのものに深く切り込むのだ（The convictions of an apparent madness did in fact cut deeply into the very axis of reality.）と進んで考え、全ての宗教的権威に根元的疑問を向ける思索の領域の中へと駆り立てられていった」¹⁸⁾ と、Herbert は述べ、Melville の根元的疑問は何であったかを次の様に推論している。「改進派（liberals）は、宗教的権威を理性にあるとしたが、Melville は、惡の事実（The facts of evil）が十分にそれと認められる時、理性は狂気に転ずる（reason turned

into madness) ことを理解した。正統派 (Calvinist Orthodox) は、神の啓示を権威と考えたが、Melville は、いかに神のものとされる恣意性 (arbitrariness) が経験の事実によって正当化されようと、正統派のいう啓示の神は崇拜するに適さないと感じたのである。Melville の根元的疑問 (radical questioning) は、改進派 (librals) と正統派 (orthodox) が同意している原理、即ち道徳的に有無を言わせない真理の構造は、神の概念を中心として組織され得るという暗黙の信念 (this implicit belief that a morally compelling scheme of truth could be organized around the concept of "God") に向けられたのである。^[19] そして Herbert は、Melville が論争の両側にいる代弁者を悩ませる多くのテーマに精神を集中して思索を進めていったとして、その論争の要点について述べている。「改進派も正統派も、神を宇宙の中心する信仰のもつ権威 (theocentric authority) の崩解に鋭い関心を持っていた、そしてそれぞれ相手方を、その結果として生じている精神的退廃 (spiritual decay) を具現している者と認識した。両者は宗教的真理 (religious truth) の根源については激しく論争したが、その根源の欠如から生じる様々な精神的倒錯 (perversions) についての分析では、同意していた。真理への導きがなければ、人間は偏執者 (bigots) か、不信仰者 (infidels) になる。即ち、それらの者は、虚偽に身を委ね、あらゆる抵抗にあってもその虚偽を頑固に維持する、或いは、いかなる宗教的信仰にも心を落ち着けることを不可能と思うのである。論争者は、こうした偏執者や不信仰者の姿を、神の真理 (divine truth) が欠如している状況の典型的なものとして作り上げていったが、それは、お互いを、宇宙の中心である神の権威 (theocentric authority) についての虚偽の概念を説いていると糾弾するためであった。^[20] ここで、Herbert は、Melville は、改進派と正統派の間の論争のテーマの中に現われた偏執者と不信仰者を、Moby-Dick の主役を演ずる人物に採り上げて、theocentric authority に根元的疑問を突きつけ、それを糾弾していると述べる、「Melville は、これらの人物を自分の目的のために徵発する；即ち Ahab の抱く目的の激しい偏執性 (intense bigotry of purpose) と、Ishmael の様々な懷疑主義 (ranging skepticism) とを並列する。それは、theocentric authority の概念を糾弾するためである。^[21]

Herbert は、この Ahab と Ishmael の性格付けについて、改進派と正統派の代表的主張を挙げて、Melville の意図を探っている。

「W. Ellery Channing は、改進派を代弁して「理性は、宗教的信仰の最終的な裁定者 (final arbiter of religious belief) であるべきだ」と主張し、理性に対するカルビニストの軽蔑に反対した。理性の軽蔑は、普遍的懷疑主義 (universal skepticism) をもたらすと信じていたからである。Channing は、宗教における最悪の誤りは懷疑主義者の冒す誤りである。懷疑主義者は、人間の知性の弱点や迷い (the weaknesses and wanderings of the human intellect) を大得意になって記録し、このような誤りを冒す知性の決定に信頼を置くべきでないことを主張するからである。かくして、カルビニズム的偏執者は、不信仰者に対して致命的となる武器 (forge the deadliest weapon) をこしらえ、真に信仰を持つ

者は絶望の脅威におそわれるのである」と特に言及した。Channing は、偏執（bigotry）と懷疑主義（skepticism）の関係についてはっきりと明言し、「偏執者と懷疑主義者がいかに接近しているかは特筆に値する。両者共、我々の能力についての自信を破壊し、あらゆる真理に疑問と混乱を投げかけるであろう」と述べている。

正統派も、神の啓示の最後の拠り所 (citadels of Revelation) を防禦するために、改進派と同じレトリックを採用した。

J. M. Mathews²²⁾ は、「神の啓示 (Divine Revelation) の二つの大敵は、迷信 (superstition) と不信頼 (infidelity) である。迷信者は、キリスト教を信じていると公言するが、キリスト教を不明にし (obscure)，人間が作り出したものや伝統の下へ埋めてしまう。迷信者は、啓示とは全く別の、神の知識を持っているという詐欺的主張の力に頼って堂々と姿を変えずに攻撃を行い、貧り喰う相手を求めて歩き廻る。不信頼者は、対照的に、信仰者に向って攻撃をする虚偽的基準の積極的信仰を持たないので、こそぞと卑劣な攻撃をする。」 Channing の偏執と懷疑主義についての分析は、迷信と不信頼という正統派の分析と類似している。そしてこの、相関的な精神の歪みは、宗教的権威の喪失の結果であるということは、改進派と正統派の指導者たちが共に認識していたことであった。

Herbert は、このような Channing や Mathews の主張と、両者に共通の認識に基いて、Ahab と Ishmael という二人の主役の登場を次の様に説明している。

「Melville は、Ahab と Ishmael を、宗教的真理に関する道徳上の権威が崩解したが故に生じた、ある意識を持つ人物として呈示することで、創造的合成 (a creative synthesis) をやってのけたのである。この二人を使って、Melville の記憶の深みの中から、苦い宗教的葛藤 (bitter religious perplexities) を引張り出し、神学的伝統のテーマやモチーフを、有無を言わせない美的イディオムを使って新たに作り直すことが可能であると知ったのだ。Moby-Dick を書いている時に読んだ書物の中に宗教関係のものもあったし、その中から借用している証拠もあるが、Melville が伝統を利用する方法は、そのような借用に限らなかつた。Melville には、彼自身の内部に、より充実した情報源 (sources) があったのである。Melville の内部に蓄積したものが頂点に達した時、長年にわたって親しんできた材料を相互に結びつけ、自ら称賛する独立した精神で使用し、それらの材料がもつ力を文学のために利用する方法を発見したのである。

Ahab を、神の悪 (God's evil) を認識する狂氣 (madness) の英雄的具現として示しながら、次第にその heroism は化物めいでいる (monstrous) ことを明らかにする。

Ishmael の懷疑主義は、いくつもの層を成す意味をもっているが、それは Melville の救世主的精神の願望が、Ishmael に、その懷疑主義的な語りの基準 (criterion of skeptical commentary) を暗黙の内に与え、そして時には、積極的希望のひかえ目な表現の中に示されるからである。Ishmael は、一時期 Ahab の抱く神なるもの (the divine) に対する憎悪を共有するが、Ahab の探求から身を引くのは、‘真理についての一貫した洞察’ (co-

herent vision of Truth) は可能ではないということを、究極的懷疑主義によって発見したからであると示される。Ishmael は、Ahab の狂気 (madness) を通り過ぎ、その向うにあるより大いなる正気 (the larger sanity) へと、その狂気に含まれる道徳的意味に導かれて入っていく、そして神の権威についての統一された構造 (unified structure of divine authority) は、経験の明白な道徳的現実とは調和しないことを発見する」²³⁾

ここまで延べてきた、T.W.Herbert、「Moby-Dick and Calvinism」のPart One (I . A Proud Coherence II . A Unitarian Tragedy III . Child of the Devil IV . Sane Madness) の中で論じられた Melville の人及び作品に与えられた宗教的影響についての考察は、Part Two (V . Ishmael as Spiritual Voyager VI . The dignity of Man : Mapple and Bulkington VII . Ahab Reprobate VIII . The Infidel's Cosmic Resentment IX . Ahab Transfigured X . Ishmael Adrift) の中で、「Moby-Dick」の展開にそって、Ishmael, Ahab を中心により詳細に進められて行く。

小論では、Part Two の V . Ishmael as Spiritual Voyager VI . The dignity of Man : Mapple and Bulkington の二つの章を、同書の原文を抄訳して、Herbert の ‘Moby-Dick’ 論を要約する。(以後の『…』は、Herbert の原文訳、「…」は、同書の中で引用されたものの原文訳である)

精神の航海者イシュマエル (Ishmael as Spiritual Voyager)

＜懷疑主義＞

Herbert は、Ishmael を精神の航海者として定義している。これはすでに述べたことから明らかのように、Ishmael は、Hawthorne や Shakespeare の真理への洞察、Calvinism がもたらす暗黒の力に触発されて、神を中心とする秩序の根元的真理に対してこれまでより一層の問いかけをしようとする一方で、Channing に代表されるUnitarian の、理性を重んじる自由な信仰によって、直接真理へ到達できるという積極的希望を持とうとする熱意を抱き続ける、Melville の語り手として登場する。第1章 Loomings での “Call me Ishmael” で始る Ishmael の独白を、Herbert は次のように分析する。

『Moby-Dick』の幕明きの文章は、Ishmael の探求の始りを、勝利或いは希望的期待を思わせる調子で示すものではない。Ishmael のこっけいな自己紹介 (jocular self-introduction) は、自分を余り真面目に考え過ぎるのは得にならないと判っている、精神的悩み (spiritual distress) を持っている者の精神状態を示唆している。Ishmael は憂うつ症のような落ち着きのなさ (vaporous uneasiness) について述べているが、そんな気分で我知らず棺桶屋の前で立ち停る。死に奉仕する棺桶屋のイメージに、もの憂い落ち着かない気分が一時的に焦点を向けたのである。

Ishmael は、直ぐに探求をすると、自分の悩みを増すだけだと言わんばかりに、この

死すべき人間の失意 (this mortal dismay) の深いところを探ろうという熱い誓などは一切口にしない。“瞑想と水が結婚している” (meditation and water are wedded) ことを説明している中で, Ishmael は, “深い意味” (deeper meaning) が測れることへの疑いを明らかにしている。つまり, “捉えがたい生命のファントムのイメージ” (the image of the ungraspable phantom of life) は, 我々が水を眺める時, 水に映る姿を見る事実の中に支えられていると言うのである。

Ishmael の冷笑的な調子は, 破滅する運命のピークオット号 (Pequod) での肉体的・精神的な恐怖をくぐり抜けて達した有利な立場 (the vantage) から, 初めの頃の素朴であった自分を回顧しながら述べているという事実によって決定的になっている。読者に語りかける Ishmael は, 精神的探求の見通しについて, すでに自分が今までそれを行ってきたが故に, 悲しげな懷疑主義的態度を採ったのである』²⁴⁾

第3章の‘潮吹き亭’ (Spouter Inn) で, Ishmael は, ニューベッドフォードの船乗り相手の宿屋 ‘Spouter Inn’ に入る。宿の主人に, 縮み首を売りに出ている食人族で, 木彫の像を崇拜する異教徒の南海の未開人 Queequeg と, 同じ寝床で一夜を過さざるを得ない破目に追い込まれる。Queequeg が帰って来た時, Ishmael の不安や恐怖はつのるばかりで, この Queequeg が床に入ってきて, Ishmael の体に手を触れた時に全く仰天する。この Queequeg の登場とそれに続く Ishmael との関係について Herbert は次のように述べる。

『Ishmael が Queequeg と初めて出会った頃の 素朴さについて冗談を言う時, それは, 自分が拒否した因襲的な見方や, 自分を導いてきた積極的希望を明確にしたのである。Queequeg との出会いのこっけいな話で使用される新米の不安 (greenhorn misgivings) は, 次第に複雑な意味を帯びてくる。

この不安は Ishmael の精神的教育の初期の段階を示すもので, 彼が精神的探求者になるに際して越えた段階である。(木像を崇拜する) 異教的慣習 (heathen practice) や男同志の肉体的親密 (physical intimacy) の禁止 (prohibitions) は, Ishmael のおかしな苦況 (comical plight) の前提 (premise) である。Ishmael は, この未開人の Queequeg との友情が深まるにつれて, この禁止事項を明確に否認する。従って, これらの禁止事項が旋回軸になって, Ishmael はこれまでのキリスト教徒の因襲的な態度から, これから先の思索の底を流れる, ものの見方の方へと変って行くのである。

Melville は, これらの問題 (禁止事項) と Ishmael の宗教的探求との内的なつながりを明確にするために, Ishmael が Queequeg と親密になって行く過程を中断し, Calvinist の権威者としての Father Mapple を登場させる。』²⁵⁾

<カルビニズム>

Queequeg と同じ寝床で一夜を過した Ishmael は、町を歩いている内に ‘鯨取りの礼拝所’ (Whaleman's Chapel) へ入り、Mapple Father の説教 (Sermon) を聞くことになる。

『Ishmael は、Father Mapple に非常に熱意を示す。その精神的権威は、高い説教壇に上って、ロープはしごを引揚げると誰もそこには近付けないことで象徴されている。Melville は少年時代に Calvinist Church と接触があったから、正統派の牧師が神の言葉 (sacred words) の解釈者として、神の真理に只一人近づくことができると主張していたことを知っていた。説教壇が、船首の形をしているのを見て、Ishmael は、正統派の信仰を抱く子供のようにその意味を読む。

“—What could be more full of meaning? —for the pulpit is ever this earth's foremost part…the pulpit leads the world…From thence it is the God of breezes fair or foul is first invoked for favorable winds” (The Pulpit pp43—44) —（これ以上の意味をもつものがあろうか？説教壇はこの地上の最先端であり、この世の中を導いていく…良かれ悪しかれ軟風の神に順調な風を吹かせ給えと祈るのは、その説教壇からなのだ）

Ishmael は説教壇の難攻不落の権威と、そこには聖書があるという事実を結び付けて、明快に、正統派の判断を口にする。

“Yes, for replenished with the meat and wine of the word, to the faithful man of God, this pulpit, I see, is a self-containing strong-hold—a lofty Ehrenbreitstein, with a perennial well of water within the walls” (The Pulpit p43) （—そう、神の言葉の肉と酒に満ちているが故に、神の信仰篤い人間にとて、この説教壇は、自給自足の要塞なのだ。—城壁内に永遠に水が湧き出る井戸のある高く聳えるエルレンブライシュタインの城のようだ。）

Ishmael が、説教壇を自給自足の権威 (self-containing authority) としたのは、自らの精神的探求者としての性格を段々と明確にして行くことと関係している。つまりそれは独立した宗教的洞察 (independent religious insights) に対する人間の能力 (human capacity) を明白に否定する信念を引合いに出しているのである。カルビニズムの正統派は、神が聖書に示される至高の啓示 (God's sovereign disclosure of himself in the scripture) をおいては、いかなる精神的真理の洞察も可能ではないと信じていた。人間の生来の精神的盲目の故に、人間の生来の宗教生活 (natural religious life) は、神に対する侮辱である。罪から救われることのない人間は、創造主たる神を崇拜しないで、神の被造物を崇拜するのが典型であると信じていたのである。これらの正統派のテーマは、Ishmael が礼拝所から帰って、Queequeg が木像の鼻をペンナイフで削っているのを見て、微妙に拡大する。

正統派は、広く偶像崇拜が行われているのを説明する時にパウロ (St.Paul) の主張を詳細に述べたのである。Melville は、自分の持っている Bible の「ローマ人への手紙 1章」

におけるパウロの中心的主張にしをつけていた。

「人間は、神によって創造された世界に神の証しがあるにも拘らず、神を創造主として崇拜し、神の栄光を讃えることをしない、それ故に許されないのである。(Men are without excuse)」正統派にとって、神を崇拜し栄光を讃えることをしないのは、神の行いの証しが不十分であることは意味しなかった。Calvin は主張した。「神が創造の際にその栄光を知らしめられた神の顯示 (manifestation of God) については、その光明は十分な程に与えられている。しかし我々人間の盲目の故に、十分だと判らないのである。」19世紀の或る正統派の評論家は、「この神の顯示は、罪人である人間が欲する全ての知識を与えるものであると主張する必要はない。神の顯示が人間を許されざる者 (inexcusable) にするだけで十分である。」と説明している。創造された秩序の中での、神自身を示される諸々の事 (God's revelations of himself) は、断固として現実であり、人間の精神生活にとって決定的なものである。それらは、無限の神 (infinite Holiness) が、神の被造物に対する亂れた崇拜に怒りを発する根拠である。しかしこれらの神の啓示が、世の中の事柄の本質にとつていかに明確であろうと、人間の暗い理解力 (darkened understanding) には謎なのである。この様な思考の枠組 (frame of reference) は、Ishmael の拡大していく精神的思索にとっては重要である。何故なら Ishmael は、自然の秩序の背後には、至高の重要性を持つ一つの現実が存在するという可能性を探求するが、その本質は、測り知れない神秘のままであると結論する。しかしながら、Ishmael はこの状況を、人間の‘許されざる墮落’ (inexcusable depravity) の兆し (signs) とは解釈しない。Ishmael の暗い結論と、人間の能力についての正統派の悲観的な評価の間には一種の類似があるが、Ishmael は、自分の探求を正統派の信じることに従って始めるのでもなければ終えるのでもない。Ishmael の探求は、反抗的態度 (a gesture of defiance) で始るのである。』²⁷⁾

<偶像崇拜と同性愛>

『Melville は、Ishmael と Queequeg との親密さが深まって行くのを語りながら、カルビニズムの教えを諷刺するのである。正統派の教えを信じる人達は、人間の手で造った偶像の精神的空虚さを非難するために、「異教徒たちは自分たち自身の想像力で自分たちの神を造る」と主張した。従って、Queequeg が木像を造る（ペンナイフで鼻を削る）時、Melville はカルビニストが、不吉な愚行と考えることを例証しているのである。正統派は、神の神聖さを強調して、真の神への崇拜以外の全ての崇拜に対する誇り高い侮蔑をヘブライの一神教から復活させていた。人間が、単に人間の手によるものを崇拜して自らの価値を低めることは、最大の墮落 (utmost depravity) と同等であると考えた。パウロは、「ローマ人への手紙、1章 25 – 27」の中で、人間が神の真理を偽りにかえた結果を述べている。“For this cause God gave them up unto vile affections...the men, leaving the natural use of the woman, burned in their lust toward one another ; men with men

working that which is unseemly" (Romans I ; 25–27)

(それは、彼らが神の真理を偽りと取り代え、造り主の代わりに造られた者を拝み、これに仕えたからです。…こういうわけで、神は彼らを恥すべき情欲に引き渡されました…男も、女の自然な用を捨て、男どうしで情欲に燃え、男が男と恥るべきことを行うようになりました)

正統派は、「神は同性愛と人間の空虚な想像力による偶像崇拜には関係があるとされたことを信じた。そして最も道徳的なギリシャ人、そして殉教したソクラテスですら恥じることもなく、我々キリスト教徒が口にできない程忌み嫌うことを実践したと信じたのである」—(Magazine of Reformed Dutch Church 4 (1831))

しかしIshmael は、未開人の友人 Queequeg の特徴である“平静で素朴な落ち着き”(calm self-collectedness of simplicity)の中に、‘ソクラテスの英知’(a Socratic wisdom)を見出すのである。余儀なく不慣れな交際をするのだが、Ishmael は、Queequeg の様々な作法や崇拜が自分の落ち着かない不安な気持を救い(redeem)始めるのを感じた。Ishmael は、聖書に登場する同名の人物に言及しているが、同時に Queequeg による救いを表現する。

“ I felt melting in me. No more my splintered heart and maddened hand were turned against the wolfish world. This soothing savage had redeemed it.”(A Bosom Friend P53)

(私の内部では何かが溶けるのを感じた。私のとげとげしい心も、狂った手も、もう狼のような世の中に逆うことを止めた。この私の心を鎮めてくれる未開人がその世の中を罪から救ったのだから。)

Ishmael は、未開人の差し出す友情の印しを受け入れ、崇拜と寝床が二人を結ぶ一種の結婚状態に入る所以である。Melville はこの Ishmael と Queequeg の関係の発展が頂点に達する時、正統派の思考体系(frame of reference)の価値観を、明確で故意な諷刺の対象とするのである。

Melville が、Moby-Diby を執筆中に手に入れた Westminster Catechism には偶像崇拜を禁じるFirst Commandment が詳細に述べられている—真の神を否定する、或いは崇拜しない、栄光を讃えないことを禁じている…神は神以外の神を持つ罪に非常に不快を抱かれる—(God is much displeased with the sin of having any other God.)²⁸⁾

Ishmael はこの教義問答について疑いのないパロディで、木像崇拜に参加することの正当性を能弁に語る。

“But what is worship ? –to do the will of the God—that is worship : And what is the will of God ? – to do to my fellow man what I would have my fellow man to do to me –that is the will of God…And what do I wish that this Queequeg would do to me ? Why, unite with me in my particular Presbyterian form of worship.

Consequently, I must then unite with him in his ; ergo, I must turn idolater" (A Bosom Friend P.54)

(礼拝とは何だ—神の意志を行うこと—それが礼拝だ。では神の意志とは何だ—同朋たる人間に自分がしてもらいたいと欲することをしてやることだ—それが神の意志だ。何を私が望めば、それがクィークエグが私にしてやりたいと思うことになるのだろうか？そうだ、私の格別の長老派のやり方で私と一緒に礼拝してくれればよいのだ。その結果、私は彼のやり方で一緒に礼拝しなければならない。故に偶像崇拜者にならねばならん。)

偶像崇拜を禁じるキリスト教の一神的排他性 (monotheistic exclusiveness) を犯すことは、Queequeg との肉体的親密さ (physical intimacy) を受け入れることにつながっている。

"So I kindled the shavings ; helped prop up the innocent little idol ; offered him burnt biscuit with Queequeg …kissed his nose ; and that done, we undressed and went to bed. But we did not go to sleep without some little chat…Thus, then, in our heart's honeymoon, lay I and Queequeg — a cosy, loving pair. " (A Bosom Friend P.54)

(私は鉋屑に火をつけた。汚れのない小さな偶像を支えるのに手を貸した。クィークエグと一緒に焼いたビスケットを供えた。鼻に接吻し、それがすむと私達は裸になって寝床に入った。しかし眠りに入るまで少しおしゃべりをした。こうして、心の密月で、私とクィークエグは、気持のくつろいだ愛し合う二人として横になった。)

「同性愛 (homosexuality) と偶像崇拜 (idolatry) についての、正統派の言うつながりが呈示され否認されている。これは、Melville が、Ishmael の個人的探求に、正統派の思想と相反する ‘精神の独立’ を与えているのである。そして Ishmael の思索の wonderland への出発に際して、人間の精神が盲目であるというカルビニズムの教義に対して故意の嘲笑を向けているのである。」²⁹⁾

<普遍的宗教>

『二人のおどけ芝居 (burlesque) は、Ishmael と Queequeg の関係に、暗黙の内に意味されている肯定的価値観 (positive values) を、Melville が詳細に述べる準備となっている。Melville はこの二人の関係を宗教観 (religious outlook) を発達させるのに利用するが、その宗教観は、Ishmael が「広大無辺の神は、一異教徒をもひっくるめて全ての人間・天も地をも支配しているが故に、たわいもない黒い木片を嫉む筈がない」(“his refusal to believe that the magnanimous God of heaven and earth—pagans and all included—can possibly be jealous of an insignificant bit of black wood”) と表現するものである。Father Mapple の礼拝における激しい厳しさ (strenuous austerity) と、二人の友情で結ばれたくつろいだ親密さとは、すべての対立する相手を許さない神聖な神 (a holy God)

への崇拜と、精神が豊かで嫉みを知らない広大無辺の神（a magnanimous God）への崇拜との精神的相違を示している点で対照的である。

New Bedford から Nantucket へ向う定期船の中で、Queequeg をからかった田舎者（a bumpkin）が、こらしめにあって、“悪魔だ”（devil）と呼び船長に助けを求める。船長が、“人喰人種め”（cannibal）と怒鳴る。この田舎者や船長が Queequeg に対して示した反応は、Ishmael が最初に示した価値観と同じである。しかし、一度は立腹して投げつけたその田舎者が帆桁にひっかけられて海に落ちると、Queequeg は水中に飛び込んで助け上げる。Ishmael にとって、Queequeg の気取らない heroism は、

“It's mutual, joint-stock world, in all meridians.

We cannibals must help these Christians” (Wheelbarrow P.61)

(世界中どこでも、相身互いの合資会社みたいなもんだ。俺たち人喰人種もこうしたキリスト教徒を助けなければならんのだ) という確信を示すものである。

Ishmael と Queequeg との関係には、キリスト教徒と偶像崇拜者、文明人と未開人の区別を超越する理想的な人間相互性という vision が暗に意味されている。Ishmael は更に、Queequeg がキリスト教の排他性（Christian exclusivism）によって挑まれる時に、Queequeg の人間性に見る宗教的意味を説明する。Queequeg が Pequod に乗り組む sign をする前に、Captain Bildad は、Queequeg が改宗している証拠を見せなければならないと主張した時、Ishmael は、Queequeg が First Congregational Church の一員であると言い返して逃れようとするが、Bildad が、教会はどことか追い詰め、Ishmael は自分のことを明らかにしなければならなくなる。

“I mean, Sir, the same ancient Catholic Church, to which you and I, and Captain Peleg there, and Queequeg here, and all of us, and every mother's son and soul of us belong ; the great and everlasting First Congregation of this whole worshipping world ; we all belong to that ; only some of us cherish some queer crotches noways touching the grand belief ; in that we all join hands.” (His Mark P.83)

(つまり、あなたも私も、そのペレーグ船長もこのクィークエグも、母の子にして魂の我ら全てが、あの古くからあるカトリック教会に所属しているのです。あの偉大にして永遠のこの神を敬う全世界の第一組合教会です。我らは皆その教会に属しています。ただわれらの内にその偉大な信仰にかすりもしない奇妙な気まぐれを大切にしている連中がいるだけです。その大いなる信仰という点で皆手をつないでいるのです。)

「Ishmael は、普遍的宗教（a universal religion）を夢想する。この宗教は、「神を敬う全世界」（“the whole worshipping”）における多様な敬神（pieties）の内にある純粋なものを正当に扱うのである。人間が共通した敬いの心で手を結び得るという希望は、人間は全て（神を）崇拜するという Ishmael の信念によって促進される。この神に対して敬いの心を持つという共通の経験は、非排他的な信仰の可能性を示す。このように思い描かれ

る敬虔な人間社会の意味は、ある特定の神への敬いが、その奇妙な気まぐれ (queer crotchets) によって宗教的真理を独占するのを認めることを拒否することを支持しているように思える。

Ishmael は、この「民主的信仰」 (democratic faith) を表現する時、排他的社会 (exclusivist communities) に対する侮蔑を表現する。

人間は、合資会社とか、国家を成して、いまわしいように思えるかも知れない、(“Men may seem detestable as joint-stock companies and nations,) しかし理想の中では人間は、「神ご自身からくる輝きを、果しなくあまねく放つ民主的威厳を持つ者である。」

(“the bearer of a “democratic dignity which, on all hands, radiates without end from God ; Himself (Knights and Squires P.104)) 人間をこんなにも気高く輝くものに、かくも壮大にして輝く被造物にしているのは、人間のこの偉大なる民主的神 (great democratic God) との関係である。Ishmael は叫ぶ、「地上全ての民主主義の中心と周辺。神は遍在なり、われらの神聖な平等！」 (“The center and circumference of all democracy ! His omnipresence, our divine equality”) (Knights & Squires P.104) そして、Melville は、自分の話に出てくる、破戒者や見棄てられた者達に高邁な特性を与えるとする時、この民主的神に訴える。明白に Ahab に言及して、Melville は祈る。「彼等の内で、最も悲しみに満ちた、いや多分最も卑しめられた者でも、時には、高壇に引き上げられことがあるとすれば、死すべき者である批評家に対して、そのことで我が身に証しを立て給え、われらが平等の聖靈よ！」

(“if even the most mournful, perchance the most abased, among them all, shall at times lift himself to the exalted mounts…then against all mortal critics bear me out in it, thou just Spirit of Equality ! ” (Knights & Squires PP104-105)

しかし、この人間の尊厳に対する信念の、究極的保証についての疑い (doubt concerning the ultimate warrant for his faith in human dignity) が、この壮大な神を讃える中にも表現されている。Melville は、「‘武勇の滅びをとげた人間’ (valor-ruined man) の光景は、神を敬う心を持つ人間でも ‘これを許す天の星に向ける非難’ を窒息させることはできない。」 (cannot completely stifle her upbraidings against the permitting stars. (Knights & Squires P. 104)) と Ishmael に言わせる。これは、‘Hawthorne and His mosses’ の中の ‘democratic spirit of Christianity についての多義的なコメントを思い起させるものである。』³⁰⁾

<眞正さと愚かさ>

『Melville の「偉大な民主的神」 (great democratic God) を信じようとする熱望は、人間の尊厳は、運命の残酷さによって破壊されると知って生じる懷疑主義的抵抗と対立する。それに相応して、Melville の Queequeg の呈示は、その懷疑主義的逆流 (skeptical cross-

current) によって複雑化される。

Queequeg を人間が持つ宗教性の純粋なものの姿として発達させて、Queequeg の宗教的慣習を宗教的諷刺の手段として用いる。Queequeg は、自分の神 Yojo が、乗り組む捕鯨船を選択してくれる、従って Ishmael が独りで出掛けても間違いなくその船に当たると信じている。Queequeg は、Yojo の摂理 (providence) の良き慈悲深いやり方を確信している、その逆のがっかりするようなことがあったにも拘らずである。Yojo の神は、かなり良い種類の神で、全てのことについて良かれという意志はあるのだが、その慈悲深い企てが、あらゆる場合に成功したとは云えなかった。（“as a rather good sort of god, who perhaps meant well enough upon the whole, but in all cases did not succeed in his benevolent designs”）

Melville の諷刺の明らかな目標は、改進派 (Christian liberals) である。神の慈悲 (benevolence) が神の至高の属性であることを主張する努力は、“悪の問題” (problem of evil) に関して重大な困難に出会ったのである。Yojo の神慮が、Queequeg と Ishmael を Pequod 号に乗り組ませたということは、この滅びの運命にある船を、Christian liberals に対する攻撃に利用する最初の場合である。しかし、もし Queequeg の Yojo 信仰が改進派、(liberalism) の自己満足的愚しさ (tatuity) を共有しているなら、それは又、正統派 (orthodoxy) の頑くなさ (rigidness) をも示すのである。

Ishmael が Pequod 号での面接から帰ってみると、Queequeg は Ramadan の儀式の最中であった。Ishmael は、Ramadan は、全く無意味で、健康にも魂にも悪い、衛生を保つ法則にも常識にも反すると言う。Ishmael の発言は、「人間の宗教はその人間にとて積極的苦痛になるのを許されるべきではない。もしそれがこの世を暮らすに居心地の悪いものにするのなら、そんな宗教は正さなければならない」（“a man's religion should not be permitted to become a positive torment to him, and when it makes this earth of ours an uncomfortable inn to lodge in, it should be corrected”）

という信念に基いていたが、Queequeg は、宗教は人間の安楽 (human comfort) に役立つべきものとは信じていない。正統派の、よく知られている信条 (persuasions) のように、Queequeg は、“神の真理は人間を測るもの” であって、人間が神の真理を測るのではないと言うのである。（He regards divine truth as the measure of man, not vice versa.）Ishmael は述べる、 “Queequeg thought he knew a good deal more about the true religion than I did. He looked at me with a sort of coudescending concern and compassion, as though he thought it a great pity that such a sensible young man should be so hopelessly lost to evangelical pagan piety. ” (Ramadan pp81-82) （クィークエグは本当の宗教については、私よりもうんと多くのことを知っていると思っていた。彼はまるでこんなに分別のある若者がどうしようもない程に福音主義の異端の神を敬うことには

すっかり溺れこんでいるのは憐れと思っているかのように、年下の者をいたわるような憐みの表情で俺を見た。) この明らかな正統派の“福音主義者”(orthodox “evangelicals”)に対する皮肉は、この二人のやりとりの前の方で、原罪(Original Sin)の教義についての parody を拡大するのである。

Ishmael が Queequeg に “hell is an idea first born on an indigested apple-dumpling; and since then perpetuated through the hereditary dyspepsias nutured by Ramadans.” (The Ramadans P.82) (地獄は、消化不良のリンゴのだんごをくらって生れた考えなんだ。それ以来、ラマダンによってきたえられた遺伝性消化不良によって命脈を保ってきたのだ。) と言うことで、Melville は、Queequeg に、遺伝的消化不良の正統派の教義のような遠い目標に直接の皮肉を向けさせるにも拘らず、Queequeg 自身の個人的宗教性 (personal religiousness) をも攻撃しているのである。Queequeg が、Ishmael に向ける “目下をいたわるようなあわれみ”(condescending concern and compassion) は、Queequeg に宗教論の冊子を与える時、Captain Bildad が説明するのと同じ、こっけいな自己満足(ludicrous complacency)を示している。

Queequeg を賞讃する時も、Ishmael は、依然として、ひとり懐疑主義的寛容(skeptical tolerance)を示す。全ての人の宗教的義務に対して、最大の尊重心を胸に抱く決心は、たとえその義務がどんなにこっけい(comical)であってもそれを気にしないのである。

Ishmael は主張する。“We good Presbyterian Christians should be charitable in these things, and not fancy ourselves so vastly superior to other mortals, pagans and what not.” (the Ramadan P. 78) 「我々善良な長老派のキリスト教徒は、こうした事に慈悲を持つべきだ。そして自分たちが、自分たち以外の死すべき者たち、異教徒などよりもはるかに優秀であると想像してはならない。」しかもそれは、世界の非キリスト教の宗教が、愚にもつかないわ言を持たない(innocent of nonsense)から、という根拠からではない。

それどころか、Ishmael は、Queequeg の敬虔(piety)は、半ば気狂いじみた妄想(half-crazy conceits)や、馬鹿げた考え方(absurd notions)に満ちていると主張し、人間の宗教性(religiousness)について更に述べる——人間は全て神を敬う本能を持っているばかりか、全体にわたって宗教的愚行(religious folly)を犯していると。“Heaven have mercy on us all. —Presbyterian and pagans alike—for we are all somehow dreadfully cracked about the head, and sadly need mending” (The Ramadans P. 78) 「天は、われら全てのものに——長老派の信者であれ異教徒であれ——あわれみを垂れ給う。なぜならわれら人間は、頭のあたりにひどく亀裂が生じている、そして悲しいことに繕う必要があるからだ。」つまり、もし人間の神に対する敬い(human worship)には、何か真正なもの(something genuine)があるとするならば、同じ程に、全体にみなぎる愚しさ(pervasive absurdity)、狂気じみたもの(something approaching madness)が、何とな

く恐しく亀裂したところがある、人間の宗教性の中にある。この精神的傾向に固有なものは、自分と同じ信仰を共有しない人間に対して、自分が正しいという優越感 (self-righteous superiority) という姿勢を取ろうとする衝動である。』³¹⁾

＜‘悪魔的’について＞

『Melville が、Hawthorne 宛の手紙で、Moby-Dick は、地獄の火 (hell-fire) で調理された (broiled) と書いている、そして、Moby-Dick の中では悪魔的 (devilish) という考え方が多くの意味を読者に与えるが、Ishmael が捕鯨船に乗り組んで船出する様子を描く章では、この devilish という用語の用法には可成り一貫性がある。‘Devilishness’ という言葉は、ある限定された宗教的、文化的なもの見方にはまりこんでいる人間が、他所者にあてる言葉として使われている。“異国風な” (outlandish) ものを軽蔑する偏狭さ (provincialism) は、限定された真実が普遍的価値 (universal validity) を持っていることを主張し、異質の敬神 (alien pieties) を忌まわしいと極めつける宗教的衝動と符号する。

Melville は、真正な宗教的探求は、このような偏狭さによって創り出された知的、宗教的境界を越えるもので、それ故に探求者は ‘devilish’ という汚名を着なければならぬことを暗に意味している。つまり探求者は、悪の支配圏 (the domain of the Evil One) と考えられる領域の中に真理 (Truth) を求めなければならないのである。

Ishmael が縮み首を売り歩く人喰人種 (head-peddling cannibal) である Queequeg と友情で結ばれること、それが招く嘲笑を受け入れることは、Ishmael を真理探求者とする定義のもつ一面を確認するものである。』³²⁾

＜或る普遍的真理＞

『Melville には、Ishmael と Queequeg の友情関係から、“広大無辺の神” (magnanimous god) が垣間見えるのだが、これは、人間の同朋意識 (human fellowship) が十分な洞察に至る道であるという主張にまでは至らない。むしろ逆に、Melville の、人間は共同生活では不寛容であるという評価は、真理の探求には、仲間意識や交際を棄てなければならぬと考える結果を生じた。この考えは Father Mappleを呈示する時の Melville の皮肉と同情 (irony and sympathy) の奇妙な混り合いを説明している。Queequeg の崇拜 (worship) と、Mapple のそれとの並列は、Mapple の堅固な誠実さの魅力を消し去ろうとする意図からではない。Mellville は、Mapple の孤独で英雄的誠実さ (lonely and heroic fidelity) を賞賛している。それは、そのような孤独で英雄的誠実さが、Queequeg でさえ共有するあの排他主義者の愚かしさによって、真理の探求に課せられる限界を越えようとするためには、探求者には必要な徳目であるからだ。

Ishmael が宗教的排他性によって孤立を強いられている探求者であることが、いくつかの集中的な型のほのめかしによって強調される。

Bible に登場する Ishmael は、放浪者であるばかりか、見棄てられた人間でもある (Genesis 21 : 10)。Melville の Ishmael は、Nantucket の Quakers の間で仕事を得る。Quakers は、Puritans が自分達の神聖な共同体 (sacred community) を保守するために New England から追放された。Ishmael は、木像の神 Yojō の providence によって、有名な Massachusetts の Indians で、古代 Media 人のように今は絶滅している種族に因んで名付けられた船 Pequod 号で海へ乗り出す。Pequod (Pequot) Indians は、Puritans によって絶滅されたのである。Puritans は、Joshua がエジプトから神が選んだ土地へ到着する前に、約束の土地を占拠していた偶像崇拜者を全滅させた事を挙げて、自分達の行為は聖書に基くものであると正当化したのである。そして最後に、狂った船長は、Ishmael も一時期そのいやしきれない宿怨 (quenchless feud) を共有するのだが、旧約聖書の中で、聖地の真只中で追放されたカナン人の神々の崇拜を復興させた罪を犯す王 Ahab に因んで命名されている。これら全てのほのめかし (allusions) は、歴史上の、自称神の御心に叶う者達 (God's self-styled historical darlings) が、神聖な集団を脅かす者達を追放したり、殺したりするいろいろな場合を想起させる。或る宗教的共同社会の排他性は、その社会の中で不和を唱える者達に対する敵意を不可欠なものとするが故に、全てを網羅するものについての洞察 (comprehensive vision) を求める者は、Ishmael にならざるを得ない。局部的信仰 (parochial faiths) の “奇妙な気まぐれ” (queer crotchets) を越えようとする努力は、Ishmael の探求の基準を明らかにしている。即ち、Ishmael は、キリスト教信者にも人喰人種にも共有されている、‘生得の人間の尊厳を認める普遍的真理’を探求しているのである。(he seeks universal Truth that acknowledges the innate human dignity shared by Christian and cannibal alike.) 従って、Ishmael の探求は本来 theocentric であり、道徳的真理の核心に在ると考えられる唯一の神性な現実の理解を目指している。(His quest therefore is inherently theocentric, aiming toward the realization of a single divine reality which is conceived to lie at the heart of moral Truth.)

Ishmael は、“The Great God absolute! The center and circumference of all democracy!” (Knights and Squires P. 104) (大いなる絶体の神！すべて民主主義の円心にして円周！) に対する信念の正しいことを立証しようと望むのである。究極の現実への洞察 (a vision of ultimate reality) と人生の経験とを適合させることができる可能性は、Ishmael の内面で継続する熟慮の一つの項目である。Ishmael は、思索を続けていく内に、一貫して柔軟な想像力 (flexible imagination) を示す、そしてその想像力によって、さまざまな文化的境界は、究極的な境界としての地位を拒否されている。Ishmael は、著しく異なる性格や確信を持つ人間によって共有されている本質的な人間性 (the essential humanity) をそれらの人間に共感を覚えながら探求し続けるのである。Ishmael は又、自然の世界を思索する時に受ける精神的意味のほのめかし (intimations of spiritual meaning) にも受容的である。そしてそれらのほのめかしは、最終的に单一の宗教的洞察を構成する

ことはないが、Melville はそれに一貫性を与えようとはしていない。

Ishmael は、自らの探求の見通しが暗い時でも、常に新しい印象を快く受け入れるのである。つまり彼の意識は依然として、 “The watery part of the world” の中で、示唆される豊富な可能性をもつ意味を受け入れるのである。』³³⁾

人間の尊厳：マップルとバルキントン（The dignity of Man : Mapple and Bulkington） <カルビニズムの権威>

『Melville が正義の平等な聖靈 (just Spirit of Equality) に訴える時、彼は人間の尊厳に対する基本的に道徳的な関わり合いから得た宗教的洞察を表現したのである。人間の尊厳に対する自由な評価を尊重する神を考えようとした人間と同様に、Melville は、地上における惡の様相は、神の慈愛 (supernal benevolence) という枠組の内側では処理できない一種の変則で、否定し得ない事実 (an anomaly, a body of undeniable fact) を創り出したということを認めざるを得なかった。しかし、Melville は又、この惡の問題 (problem of evil) は、正統派の思考の枠組 (frame of reference) の中では生じないことも知っていたのである。

人間の苦しみ (human suffering) についての Melville の思索は、人間は値しない難儀を受ける筈はないのであるというカル빈の信念 (Calvin's belief that man cannot suffer unmerited afflictions) のもつ含蓄を探ろうとすることで、測り知れぬ程に深まるのである。

Father Mapple の説教 (sermon) は、改進派 (liberals) が人間の尊厳に対する侮辱と考える正統派の敬虔 (piety) から直接生れてくる。

Father Mapple は、Jonah への鯨の攻撃は、全ての人間が持つ原罪に対する神の怒り (God's wrath against original sin) の一例であると説く。正統派の見解では、正当化されない、この世での難儀 (unjustified worldly suffering) は有り得ない、何故ならこの死すべき人間の生活 (this mortal life) のあらゆる悲惨 (all miseries) は、人間の生来の神に対する服従の拒否に及ぶ神の怒り (God's indignation against the innate refusal to obey him) を満足する事がないからである。

Mapple は指摘する、 “all the things that god would have us do are hard for us” because “if we obey God, we must disobey ourselves ; and it is in this disobeying ourselves, wherein the hardness of obeying God consists.” (The Sermon P. 45)

(神がわれら人間にさせたいと思っておられる全てのことはわれらには難しいことだ。何故なら、もし神に従えば、我ら自身には従ってはならないからだ。神に従うことの難しさは、この自分自身に従ってはならないことにある。)

Calvinist の神は、人間の理性や道徳的感覚に訴えて、神への服従 (compliance) を求め

てはいない。人間は、その墮落した本性（fallen nature）の命ずることに背かなければならぬのである。

かくして、Mapple は、‘神はわれらを説得しようとなさる（endeavors to persuade）よりは、しばしばわれらに命令される（command）のだと述べる、そしてヨナ（Jonah）の話は、人間の不服従’（recalcitrance）に対する神の扱い方の例とするのである。ヨナ（Jonah）の神への不服従の故に、神は鯨の形でヨナを襲い呑み込まれたのだ。（“God came upon him in the whale, and swallowed him down”）（The Sermon P. 50）

Mepple は、ヨナの扱い方を、人間の墮落という教義（doctrine of human depravity）に従って処理するが、それはアメリカの初期の時代からのオランダ改革派教会（Dutch Reformed Church）に影響を与えていた‘再生’（rebirth）を強調する福音主義の伝統（evangelical tradition）の中での精神生活に適応していたからである。

Melville の祖母が所有していた Doddridge's Rise and Progress of Religion in the Soul は、波乱に満ちた精神的再生（turbulent spiritual regeneration）の過程を述べているが、そこでは、罪人（the sinner）は、‘目覚め’（‘awakened’），‘宣告を受け’（‘sentenced’），‘その宣告の恐しさにがくぜんとして’（‘struck with the terror of his sentence’）それから‘救いのしらせ’（“news of salvation”）を受けるのである。

ヨナの話を紹介する時、Mepple は断言する — “As sinful men, it is a lesson to us all, because it is a story of the sin, hard-heartedness, suddenly awakened fears, the swift punishment, repentance, prayers, and finally the deliverance and joy of Jonah”（The Sermon P. 45）（これは罪深い人間としてのわれら全てへの教訓である。何故ならば、これは、罪、かたくな、心、突如として目覚める恐れ、速やかな罰、悔改め、祈り、そして最後に神の救いとヨナの喜び、という話だからだ。）

Mapple が説教をするWhaleman's Chapel で唱われる讃美歌は、オランダ改革派教会（Dutch Reformed Church）のものに非常に似通った改作であるが、この‘罪人が救われるまでの進行’（progress）の中心となる事件を強調する、つまり罪人が自らの全くの救いの無さ（total helplessness）を知り、神に助けを求める、重大な危急の場面である。

I saw the open maw of hell,
with endless pains and sorrows there,
which none but they that feel can tell—
Oh, I was plunging to despair

In black distress, I called my God
When I could scarce believ him mine,
He bowed his ear to my complaints—
No more the whale did me confine. （The Sermon p. 44）

「われは見たり 口を開いた地獄のはらを
 果しない苦しみや悲しみをたたえて
 それを感じる者にしか判らぬもの
 われは絶望の渕に身を投げんとしていた
 暗い苦悩の中で神の名を呼んだ
 とき、神をわれのものとは思いもせず
 神はわが訴えに耳をかし給い
 鯨はもはやわれを捕えることなし」

Channing が、カルビニズムの神学体系は、人間の心に与える恐れの故に存続してきたと主張する時、正統派の敬神（piety）の重要な核心を言い当てているのである。

神（the Holy）の意識に内在する根本的恐れ（primal dread）は、プロテスタント正統派（Protestant Orthodoxy）の信仰の伝統の中で決定的に道徳的役割を与えられた。死すべき人間の存在（mortal existence）の根本的不測性（radical contingency）は、致命的な道徳的墮落（deadly moral depravity）の只中での無力さ（helplessness）として経験されたのであり、この無力さは、救い主（savior）を絶対的に必要とすることを証明したものである。

Melville のこの正統派の伝統の意味深い流用（profound appropriation）は、その教義によって生じている事項についての知識を越えて拡大する。つまり Father Mapple の説教では、神の正当な判断は、ヨナの内的生活を構成する要素の中で作用しているのである。Melville は、微妙な表現で、自分が犯した罪（guilt）から逃れることも、それを和らげることもできない人間が味う良心の呵責（The writhings of conscience）を描く。

“Like one who after a night of drunken revelry hies to his bed, still reeling, but with conscience yet pricking him, as the plungings of the Romans race-horse but so much the more strike his steel tags into him ; as one who in that miserable plight still turns and turns in giddy anguish, praying God for annihilation until the fit be passed ; and at last amid the whirl of woe he feels, a deep stupor steals over him, as over the man who bleeds to death, for conscience is the wound, and there's naught to staunch it ; so, after sore wrestlings in his berth, Jonah's prodigy of ponderous misery drags him drowning down to sleep” (The Sermon PP. 47-48)
 (一夜の酒に酔って騒いだ後で、いまだ千鳥足で寝床へ急ぐが、良心の呵責は、ローマ人の競争馬の突進のようで、その鉄の金具が一層ひどく喰い込むようであった。或いは又、同じ惨めな苦境の中にある人間が眩暈^{めまい}のする苦しみを覚えながらぐるぐると身体を反転させながら、この発作が過ぎ去るまで神に寂滅を祈っているみたいなものだ。そして遂に、その悲しみの錯乱の最中に、深い無感覚状態が忍び寄ってきた、まるで出血多量で死ぬ人間のように、というのは、良心は血の出る傷だからだ。そしてそれを止めてくれるものは

ない。そこで、寝台で苦しみもがいた後で、その並外れて重い悲惨で、ヨナは溺れるよう眠りに落ちこんで行った。)

この文は、苦悩と致命的消耗の入り交っている直喻や、死と眠りが平行して完全にその役目を果し、“彼を溺れるごとく眠りに引き込む”という葬儀を思わせる響鳴に変って行くまで持続する時の経過と共に、Father Mapple のカルビニズムの訓戒 (Calvinistic exhortation) の中で、その位置に完全に適した力強い構造を持っている。この文は、墮落した心の無益のあがき (futile strive) を伝えている。まるで最後の死の避けがたい結末に抵抗するように phrase を次々に継いでいきながら、その罪は生得である、従ってその罪から逃れようとする人間の努力は、それ自体が病に冒されていて、その苦境を悪化させるだけという、人間が感じる宗教上の絶望 (religious desperation) を表現している。

犯した罪におののくヨナは、まだ真の悔い改めはしていない。即ち神の罪に対する正当な罰 (righteous vengeance) は、まだその十分な恐しさ (full terros) を示していないからだ。鯨の畏怖させる力 (awesome might) と推測される凶暴さ (presumed ferocity) は、カルビニズム正統派の伝統的な、神の怒り (the wrath of God) についての解釈の象徴であった。神がヨブ (Job) の反逆的疑問を沈黙させた有名な報復を示すものとして、Leviathan は、人間の（神に対する）無礼 (impudence) に対する神の力の顕現であるとされていた。

Calvin は、Book of Job に関して65の sermon を発表した。そして彼が確立した伝統において、Leviathan は、典型的に鯨と同一視され、無礼な罪人を恐れさせるのに呼び出されるのであった。

この恐怖が正しい悔い改めをさせるのなら、罪人は、神が恐しい苦しみを与えることは正しかった (God has been righteous in his dreadful inflictions) と認めるのである。人間は全て墮ちた者であるという教義 (the doctrine of total depravity) は、告発された罪人に、自らに対する全くの嫌惡 (total self-abhorrence) を要求するということを暗に意味している。罪ある人間として、「我々は全能の神の罰を進んで認めなければならない。そして我々自らを裁き、我々に地獄行きを宣告するかもしれない神を正しいと考え、我々を罪人とする証人に自らがならなければならぬ。」

それ故に、Mapple は、ヨナの最後の服従 (eventual submission) を賛える。“Jonah does not weep and wail for direct deliverance. He feels that his dreadful punishment is just...And here, shipmates, is true and faithful repentance; not clamorous for pardon, but grateful for punishment. And how pleasing to God was this conduct in Jonah, is shown in the eventual deliverance of him from the sea and whale” (The Sermon P. 49)

(ヨナは、すぐに救いを求めて涙をこぼして泣いたりわめいたりはしないで、神の罰に感謝する。このヨナの行いが神にとってどんなに満足であったことかは、ヨナが海と鯨か

ら救い出されたことで示されるのだ。)

ヨナの神の怒りを受けた苦闘に満ちた旅は、最終的には彼の救いとなるのである。ヨナは、神の目的に仕えるようにすっかり変身して、鯨の腹から‘再生’するのである。

讃美歌は、説教の情緒的な方向に一致しているが、最後には、神の救い(God's rescue)を歓喜して賛えることで終る。Melville は、Mapple が、「長々と莊厳な口調で救いの歌を読み始めたが、結びの文句になると、とどろくような歓喜を爆発させた」と言うのであるが、同様に Mapple は、説教を結ぶときに、自らに背くことを身につけ、神の眞の子になる人間が持つ義務の実践がもたらす昂奮した感情を喚起する。

“And eternal delight and deliciousness will be his, who coming to lay him down, can say with his final breath—Oh Father!—chiefly known to me by thy rod—mortal or immortal, here I die. I have striven to be thine, more than to be this world’s or mine own.” (The Sermon P. 51)

「永遠の喜び、甘美さは、やがて死の床に横わる時に、あなたの鞭によって知ることしかなかった、父よと最後の息で呼ぶことのできる者のものになるであろう。死ぬべきであろうと不滅であろうと今私は死にます。私は、今まで、この世のもの、己れがものになるよりは、あなたのものになろうと努めてきました。」

Calvinism は、神との喜ばしい和解(joyous reconciliation with God)と神への奉仕に入ることは、神の怒りに従うことによって成就しなければならない。その神の怒りは、自然人(natural man)が出会う全てのことに明らかに現われ、恐れを覚えさせるものである、ということを教えた。Calvin 自身が、ヨブ記の Leviathan を論じる中で、明言した—「神は、全ての喜びをわれらが見出すようにという意図で、われらを神の方へ誘なわれる、しかし、我々がすっかり罰によって打ちくだかれて始めて、神のところへ行けるのである。従って、喜びの前にまず恐れがこなくてはならないのだ」(Therefore, there must first go a fear before)

Melville は、自分の聖書の中に「耐える心は誇る心に勝る」「the patient in spirit is better than the proud in spirit」という記述を見出した時に、余白に“Christianity this”と記したが、これが、Christian teaching の a paradigm だと思えたのであろう。』³⁴⁾

<男らしさ>

『Melville は、堂々たる Father Mapple の魅力的な男らしさ(appealing burliness)を示すが、彼の教えの中に何か男らしさ(manliness)を害うようなものがあるのを感じた証拠を示している。The Tail の章で、“the soft, curled, hermaphroditical Italian pictures of Christ most successfully embody “his idea,” and that “ destitute as they are of all brawniness, [they] hint nothing of any power, but the mere negative, feminine one of submission and endurance, which on all hands it is conceded, form the pe-

culiar practical virtues of his teachings”」「イタリア人の描く柔軟で捲き毛の雌雄同体的な身体つきのキリストは、最も上首尾に彼の‘思想’を具現している。それらの絵は男性美を欠いているので、力強いものは一切ほのめかしていなくて、単に否定的で、服従と忍耐という女性的なものを暗示するだけだ。そして、全ての人が認めているが、その服従と忍耐がキリストの教えに特有な実践的徳目を成しているのだ。」

しかし、服従という女性的と思える徳目を Father Mapple の教えが暗にほのめかしているとしても、それは Mapple の人間 (person) を示す特徴ではない。Melville は、Mapple を描写するのに聖書 (John 3 : 4) にある再生の教えに言及している— “Mapple had entered that sort of old age which seems merging into a second flowering youth, for among all the fissures of his wrinkles, there shone certain mild gleams of a newly developing bloom” (The Pulpit P. 42) 「マップル神父は、花咲く第二の青年期に入るように思われる老年期に入っていた、というのはしわの割れ目から、新しく大きくなろうとしている花の様な和らかい輝きが光っていたからだ。」

この Mapple には、Mapple が示す雄々しい正統派の精神を Melville が最初に見出した牧師 Jacob Brodhead を特徴づけていた、謙遜と男らしさ (humility and manliness) があったのだ。

Melville は、この Mapple とは対照的な男らしさ (manliness) を示す、超然として醒めている (aloof and sober) Bulkington を示す。

「上品な肩付き、匂いぜきのようにがっしりした胸」(“noble shoulders and a chest like a coffer-dam”)を持つこの男は、仲間から偶像視されている。しかし彼の顔には“余り喜びを与えると思えない思い出” (“some reminiscences that did not seem to give him much joy”) が顔に刻まれている。一つの航海が終ると直ぐ又次の航海に出る Bulkington の風変りな癖は、知的独立 (intellectual independence) を維持しようとする必死の努力を示す姿であると、Melville は描いている。

嵐が船を岸辺にうち上げようとする時、船は難破しないためには、風と闘って海上にいなければならない。それと同様に Bulkington も記憶にある悲しみに心が乱れるが、冷静 (self-possession) を維持しようと努力しているのである。

Mapple は、救い (salvation) は、全くどうしようもなくなつて (through being overwhelmed), 罪に対する神の怒りとして、自然の怒り (fury of nature) を受け入れて始めてやってくると言う。しかし、Melville は、Bulkington をこの自然の怒りである嵐に対抗する男らしい人物として描くが、それは人間の自己充足性 (self-sufficiency) を得ようとする努力と神の絶対的主権 (God's sovereign power) との間には根深い敵対 (hostility) があるという正統派の信念によっている。Bulkington は、この敵対を示す象徴である。

“mortally intolerable truth ; that all deep , earnest thinking is but the intrepid effort of the soul to keep the open independence of her sea ; while the wildest winds

of heaven and earth conspire to cast her on the treacherous, slavish shore” (The Lee Shore P. 97) (命にかかる程堪えがたい真理；あらゆる深い、真面目な思考は、われらの魂の、その海からの独立を保とうとする大胆な努力に過ぎない。一方、天と地のもっとも猛烈な嵐は謀みをめぐらして、その魂をあざむき奴隸にせんばかりの浜辺へ打ち上げようとする。)。

Melville は、卑屈な服従 (cowardice of submission) には全くの軽蔑を表現する。

“Better is it to perish in that howling infinite than be ingloriously dashed upon the lee, even if that were safty ! For wormlike then, oh ! Who would craven crawl to land ! ” (The Lee Shore P. 97)

(たとえそれが安全だとしても、不名誉にも風下の岸に激しくうち上げられるよりは、口孔えるあの無限の中で滅びるがましである。蛆虫のように、誰が陸地へ向かって這うことを見むだろうか。)

Maple の説教を背景にして、Bulkington の苦闘は、(被造物たる人間に屈辱を与えるために嵐を起す) 神と対決して、男らしい自己充足性を維持しようとする努力として浮き彫りになる。

Bulkington の肉体的に勝れている誇り (pride of physical honor) は、屈従することを軽蔑して拒否する精神的な誇りと一つに結びつくのである。

Father Mapple には、雄々しい男らしさ (heroic manliness) と、神の怒りの顯示 (manifestations of God's wrath) は、一つであった。Whaleman's Chapel の内側の壁に、一隻の勇ましい船が、黒々とした岩やそれに碎ける雪のように白い波を見せる風下の海岸の沖合で猛烈な嵐と闘っている (“gallant ship beating against a terrible storm off a lee coast of black rocks and snowy breakers”) (The Pulpit P. 43) 絵がかかっている。雲の切れ目から、微笑む天使がはげますように見下している。風下の海岸の沖合で嵐に遭っている船の苦境を、神と対立する精神的な立場をとる人間として用い、Melville は、神の愛顧を受ける人間の軽蔑をものともしない正統派の信念での雄々しさ (heroism of orthodox faith) と、全き自己充足性と独立 (self-sufficiency and independence) を維持する努力の中で、人間と神の双方から受ける敵意をものともしない雄々しさ (heroism) の対照を指摘している。

Bulkington には、天使は微笑まない。彼は嵐との生命がけの戦いで、自ら神格 (godhood) を得ようとしているからだ。Melville は叫ぶ— “Bear thee grimly, demigod !

Up from the spray of the ocean-perishing-straight up, thy apotheosis ! ” (The Lee Shore P. 98) 「汝、半神よ、きびしく耐えよ！ 海滅びの飛沫よ上れ！ まっすぐに、汝の神格よ！」 Melville が Bulkington と Mapple によって呈示する相対する型の精神の雄々しさ (spiritual heroism) は、Captain Ahab に示される、より壮大な雄々しさ (heroism) が定義される知力と精神にかかる様々な問題の母胎 (matrix) を準備するものである。

Melville は、年老いた鯨取り（old whale hunter）に、悲劇的英雄の堂々たる高邁さ（the stature of a tragic hero）を与えるという問題に直面していること、つまり、主役（protagonist）が、Shakespeare の名高い悲劇の王が着けている感動的な王候としての飾りを欠いていることに気付いていた。

“Oh, Ahab ! what shall be grand in thee, it must needs be plucked at from the skies, and dived for in the deep, and featured in the unbodied air !” (The Specksynder P. 130)

(お、エイハブよ！ 汝に何を着せれば立派になるのか。天から引きちぎるか、深い海にもぐって手に入れるか、体のない空気の中に描き出すかしなければならない！)

Ahab の雄々しさ（heroism）は、精神上のものである。そしてこの heroism は、一組の重要な思想と Ahab との関係の上に在るものである。Melville は、Ahab の探求（quest）に神と人間の道徳的関係についての liberal-orthodox の論争の核心に至る様々な意味を与えている。つまり、Melville は、Ahab を、怒れるCalvinist God が支配していると思われる世界における、人間の尊厳の運命を探るために使うのである。』

本論は、紙面の都合で今回はここまでにしたい。Herbert の “Moby-Dick and Calvinism” Part II の VII ‘Ahab Reprobate’ 以下 Conclusion までについての考察は次回に掲載する予定である。

引用文献

- Moby-Dick ed. Harrison Hayfoud and Harshel Parker (New York 1967)**
- Moby-Dick and Calvinism : Thomas W. Herbert, Jr. (1967 New Jersey)**
- 1) Moby-Dick and Calvinism P. 83
 - 2) ibid P. 83 (Letters of Herman Melville P 124)
 - 3) ibid " "
 - 4) ibid P. 84 (Letters of Herman Melville PP. 124—125)
 - 5) ibid " "
 - 6) } ibid P. 85
 - 7) } ibid P. 86 (Letters of Herman Melville P. 129)
 - 9) ibid P. 87 (Letters of Herman Melville P. 128)
 - 10) } ibid P. 87 (Letters of Herman Melville P. 130)
 - 11) }
 - 12) P.88
 - 13) ibid PP.87—88
 - 14) ibid P. 89 (The Conflict of Ages : Edward Beecher P 189)

 - 15) } ibid P. 89
 - 16) }
 - 17) }
 - 18) } ibid P. 89 (The Conflict of Ages : Edward Beecher P. 189)
 - 19) }
 - 20) }
 - 21) ibid PP. 89—90
 - 22) ibid P. 91 (The Bible and Men of Learning : J.W. Mattews)
 - 23) } ibid PP. 91—98
 - 27) }
 - 28) ibid P. 100 (The New England Primer PP. 339—340)
 - 29) } ibid PP. 98—116
 - 35) }

On Religious Influences on Herman Melville (3)

Masao OKAMOTO

Faculty of Liberal Arts and Science

Okayama University of Science

1-1 Ridaicho, Okayama 700 Japan

(Received September 30, 1989)

In this study as the third publication of the same title, the writer's purpose is try to gain a comprehensive understanding of the religious influences, articulated in Herman Melville's works with focus on *Moby-Dick*.

In this paper, the writer traces the religious struggles while Melville was preparing for *Moby-Dick*, and the final outcome of those which are expressed in the work of *Moby-Dick*, citing the relevant parts discussed in "Moby-Dick and Calvinism" by Thomas W. Herbert Jr.